川について へiく

齋藤礼旺

むかえる箸の手つきで

陰影が照らすのは

男たちの喉笛ばかり

捨てるために仕舞いこむ

苗字や肩書きがあるとして

娼婦のささやき声に

運ばれてくる麦酒は

どうも胡散くさく目の前を

上書きしてしまつてかなわない、

川だ

敗戦がよぎる、というのは

紛れもない建前であつて

この頃の私は

川の支流に幼い喉を向け

隣街かそのまた先にそびえる

尖塔を審美するのに夢中だった。

無数の脆弱に足をとられつつ、

それが身体か藻のしわざか

娼婦というものを未だ知らなかったから

水面だか鏡面だかに顔をぎんぶと浸し

漂流したセピヤの瓶へ関心に移せば

後は時系列に済んだことだった

川をずいぶん飲み込んだ子供だ
青白い腹が私と尖塔の間にある
非番の水夫が胸を圧していくと
すんでのところで川は水に還り
子の輪郭は急速に取り戻される

そうして近頃の男たち

あの胸骨のようなネク・タイは
麦酒に流れたきりもうわからない